

北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

④<ピアノ組曲>

新音楽連盟を旗揚げ

二中時代、絵と音楽の両方やっていたことが、よく「どうして」と聞かれるんですけども、やっぱりヨットを知らなかったというショックが大きかったのではないのでしょうかねえ。とにかくみんなはこういうことを知っているんだから、自分も何かやらなければと思ってました。

それともうひとつ、いずれ兵隊に引っぱられて死ぬんだという感じがあって、急いでいろんなことをやらないと、生まれてきたかいがないということも心にありましたね。

まあ、ピカソやブラックを目標にやっていた絵の方は、そのうち、これはちょっとああはいかないな、とわかってきて、自然に遠ざかりましたが…。

二中を出てから一年ちょっとブランクがあって、昭和七年(一九三二年)、北大農学部林学実科に入ったわけです。

北大には文武会オーケストラというのがありまして、僕はそこのコンサートマスターをやりました。そして九年、これとは別に、三浦君や早坂文雄君(故人、作曲家)らと新音楽連盟というのを、結成しました。音楽会であまり演奏されない新しい作品を取り上げていこうというのが趣旨で、旗揚げ公演ではエルビン・シルホッフとかエリック・サティとか超モダンの作曲家の作品を並べました。私がバイオリン、早坂君がピアノで、この時の演奏曲目はほとんど日本の初演になっております。プログラムは今も手元にありますが、フランス語と日本語で書いた二十五ページもあるものです。

この旗揚げ公演のあと、カルテットを組んで、札幌、旭川など、あちこちに出かけました。

コーブランドが激賞

この間、大学に入って二年目には「ピアノ組曲」を作っています。十九歳の時で、これがまあ、世に出た最初の曲といえます。書き始めたのは確か中学のおわりだったと思いますが、それはこんなきっかけからです。

そのころ、ビクターの赤盤で、スペインにいたピアニストのジョージ・コーブランドの「スペイン音楽集」というのが出たんです。ところが評判が悪くて悪くて、あらゆる音楽雑誌に批判が載るといふ状態。それで三浦君と二人で富貴堂に聴きに行ったんですけど、どうしてどうしてこれがまあ立派でねえ、もう驚きいっちゃって。二人してレコードを買い、こう批判されてはかわいそうと手紙を書くことにしまして、英語の達者な三浦君が書いて送ったんです。

そうしたら返事がきて、「私の演奏を地球の裏側でわかるぐらいなら、よほど音楽の勉強をしているか、少なくとも作曲ぐらいはしているんじゃないか」と書いてあるわけです。三浦君が「私の友達に作曲家がいる」とまた手紙を出したところが、「ピアノ曲を送ってくれ」といつてきた。

そこで私は「弱ったなあ」と思いながらも書いて送ったんです。

これが「ピアノ組曲」(一九三八年ベネチア国際現代音楽祭入選)です。コープランドからは「かかとを痛めて静養しているが、直ったら必ず上演する。ひじょうにいい曲だ」と返事がきまして、うれしく思っていたところが、一九三六年、スペインでは内乱がぼっ発。それきりコープランドからは音さがなくなってしまいました。



▲自身のピアノリサイタルのために来札した、松平頼則氏(前列右)を囲んで。

後列左端が昭、中央が勲、前列左が早坂文雄氏

五十年後に日本初演

それから何年かたって、チェレプニン(作曲家、ピアニスト)が日本に来たわけです。私が「日本狂詩曲」でチェレプニン賞を受けた翌年ですが、その時チェレプニンが「この作品より前のものはないか」というので「ない」と答えると、「うそをいってはだめだ。ここまで書けるには絶対何か作品があるはずだ」って。それで「ピアノ組曲」を見せたんですが、「いやいやこれは立派なものだ」というわけです。

一九三六年に、この組曲のうちのひとつ「盆踊り」がチェレプニンによって外国で初演されましたが、実はこれ、ひどく難しいんですよ、弾くのが。ですから日本での初演はつい二、三年前で、書いてから五十年ほどたってましたでしょうか。(※)

※本会註；ピアノ組曲の「盆踊り」の日本初演は伊福部自身立会いの下、1936年にチェレプニンにより行われている。この段の記述は「日本狂詩曲」に関する事項との混淆と思われる。

昭和 60 年 4 月 1 日(月)夕刊
月曜ぷらざ